

インドネシアの人種と歴史

高島 清

“インドネシア” という国は どんどこか と聞かれると 中年以上の人は 第二次世界大戦中 日本軍が進攻し オランダ軍と戦闘を交えたオランダの植民地 蘭領東インド諸島を想起し 石油資源その他の鉱物資源にとむ島々 パナマやマンゴスチーン ドリアンなど南方特有の果実にとむ南洋の楽園を考えながら話すだろう。また 若い年代の人は 終戦により オランダの植民地政策から 解放され 独立を勝ち得た新興国であると考えよう。そのとおりであって インドネシアは現在日本の明治維新にも相当する時代にあたり スカルノ大統領のもとに オランダの植民地政策により閉ざされていた文明 科学の遅れを取りもどさんと 懸命に努力している国である。

目新しいことでは 第四回アジアスポーツ大会が その首都ジャカルタ郊外で はなばなしく開かれ 多数の日本選手が参加して 過半数のメダルを獲得しているがこの際台湾 イスラエルの選手団の入国拒否問題から ジャーナリズムの話題になったことも記憶に新しい。

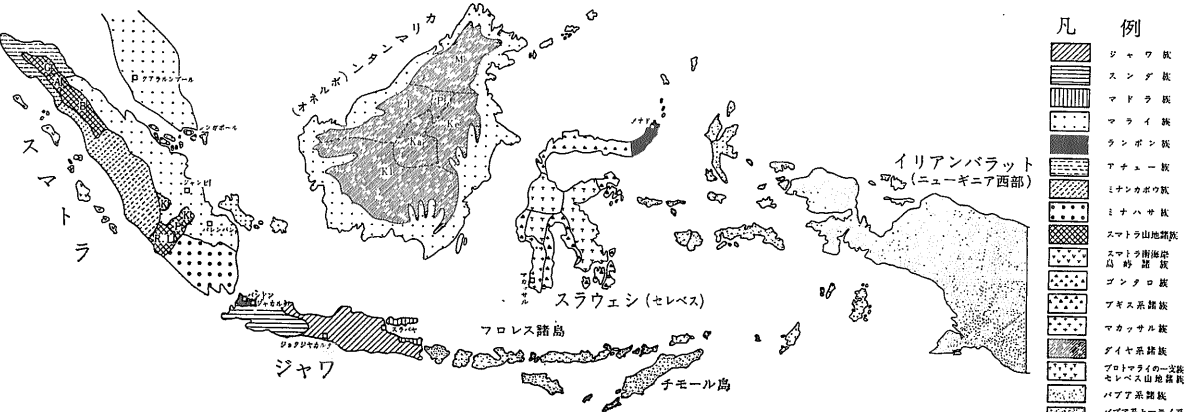
西イリアンの解放について オランダと抗争し その主権を獲得したことも新しいことであり 最近のマレーシア連邦に反対の意思表示をして 新聞紙上をにぎわしていることも 注目値する。池田首相は 東南アジア親善旅行の際 この調停に対する強い熱意を示していたが このようなことは日本が東南アジア諸国に対する関心の深いことを示す事実の一つにほかならない。昨年の初め パリ島の火山爆発により 多数の被害者がたことも 日本の火山爆発の例と似て 感慨深いものがある。たとえば人口の点でも最近では 1億を超過したといわれ その点では日本と匹敵するほどの大きな国であり その過半数が ジャワ島に住み 人口密度が世界で最も大きい島の中に入ることも有名である。

ひるがえって この国と日本との友好関係も 今に始まったことではなく 十数世紀頃から行なわれていたようである。

日本人と同じようにモンゴール系漢族の血を受けているインドネシア人は 日本人とその容貌 体軀が類似するのは 当然のことと思われ 私たちが交際する身近の人々の中にも インドネシア的な容貌を持っている人が多いことは 興味がある。インドネシアの某公館のレセプションで 正真の日本人が 外国公館員からインドネシア語で話しかけられ インドネシア人と間違えられることなどは 日常の茶飯事と思われる。日本人と非常によく似ているといわれるミナハサ族 (スラウエシ北部 メナド近くの種族) は 中肉 中背で 色は比較的白く 鼻が高く 頭髪は黒く 容貌は端正で この中で高地に住む一種族などは 薄紅色のほほを呈した色白の肌を持ち 瓜実顔が特長的で 日本娘と見違えるほどであるといわれる。

地理的にも フィリピンのミンダナオ島の南にあたる ところから この位置より少し東にこぎだせば 太平洋の黒潮にのり 文明のあまり進まない時代にも 勞せずして 沖繩や日本列島に 到着できるものと思われる。童話の浦島太郎や 因幡の白兔の物語も その主人公の流れついた場所が 案外このあたりからで あったものと考えられる。また 沖繩や日本の南の島でうたわれる民謡にも そのメロディーが 南洋 インドネシア風のものがあるところから 古い時代からの一連のキズナが連想される。

*1 因幡の白兔の物語では 主人公である大黒様はその名称から 大きくて黒い神様が想像できるし また 米の神様でもあり 米が 南方から伝わって来た由来とも一致している。また 物語中のワニは 日本には



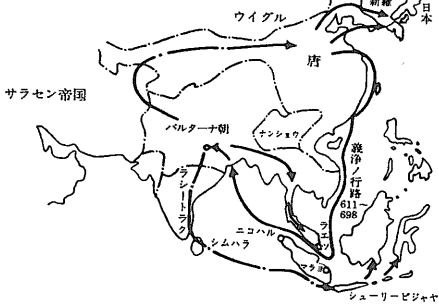
生獲しない動物であることを考えても この様な物語が二千年も昔から 日本に伝わっていることはその当時のつながりを示す好例といえるだろう。

*2 沖縄のマタハリの歌もこの一つで「マタハリヌ チンタラ カミ サマサマヤ」という歌の言葉でマタハリは太陽を表わし チンタラは愛するの意で カミはわ

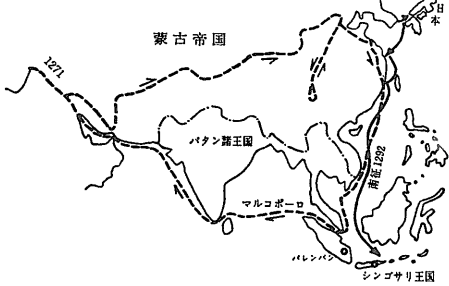
れわれ サマ サマは等しくとか 一緒にかという意味であることも 興味があり インドネシア語の“kah”の語尾詞が 疑問を表わす言葉として 日本でも 使用されていることから 言語学的にも 関連のあったことが推察される。

またインドネシアは 地質時代にアジア大陸とつづい

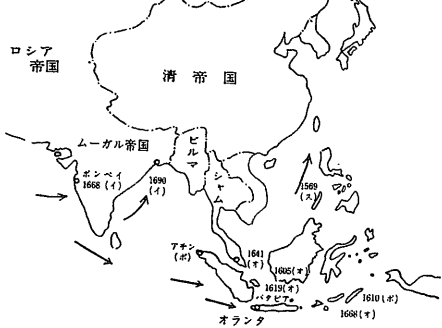
八世紀ごろの東南アジア



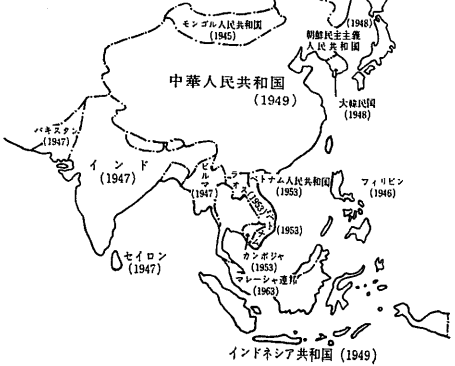
13世紀後半の東南アジア



18~19世紀頃の東南アジア



第二次大戦後のアジア新興国家



日本		インドネシア		世界	
時代	おもな事象	年代	おもな事象	年代	おもな事象
原始社会	縄文式土器の石器 狩猟器を使用	有史以前	マレー半島との交通によるマライ語の移住と土器 漁具の輸入	5000年前	人類出現
1	縄文式土器を使用	57	島の使者 後戻り行く	3000年前	南緯アジア 氷河期時代に入る
2		391	このころ大和朝廷全国を統一	75	オーストラリア 南緯アジア
3		538	仏教伝わる	56	シベリアより
4		562	任那の日本使節はる	35	北下りする
5		607	日 蘭の交通始まる	49	オーストラリア
6		645	大化の改新	334	アラブ半島より
7		607	日 蘭の交通始まる	21	マレー半島
8		645	大化の改新	20	アラブ半島
9		804	僧 鑑真渡唐に留学	27	アラブ半島
10		894	遣唐使を廃止	4	
11		939	平将門の乱	74	埃及とローマとの交通始まる
12		1167	平清盛太政大臣となる	375	グプタ文明
13		1192	源頼朝鎌倉幕府を開く	395	ローマ帝国の没落
14		1274	支那の侵襲		西ローマ帝国はる
15		1281	弘安の役	571	マホメット生まる
16		1338	室町幕府開かる	589	隋、中国統一
17		1403	隆徳さかん	610	ゾロアスター教
18		1467	応仁の乱	622	ヘジラ (イスラムの紀元元年)
19		1549	キリスト教伝来		マヤン文化ヨーロッパに入る
20		1569	徳川幕府開かる		
		1613	文禄の役		
		1639	寛永の鎖国令		
		1717	享保の改革		
		1791	外国船打払令		
		1792	ロシアの使節きたる		
		1804	ロシアのレーニン長崎きたる		
		1808	開港林義カヲヲを採択		
		1853	ペリー来航		
		1857	安政の条約		
		1863	長崎開港		
		1873	明治憲法公布		
		1889	明治憲法公布		
		1894	日清戦争		
		1904	日露戦争		
		1910	日韓の合併		
		1923	関東大震災		
		1941	太平洋戦争		
		1945	終戦		
		1951	平和条約 安全保障条約を結ぶ		
		1974	オイルショック		
		1980	北京オリンピック		
		1989	天安門事件		
		1991	ソ連の崩壊		
		1999	ユーロの導入		
		2001	9/11同時多発テロ		
		2008	金融危機		
		2011	東日本大震災		
		2015	パリ協定		
		2020	COVID-19パンデミック		

ていたことは種々の文献や 古地理 動植物の分布 人類学上から知られている事実である。有名な“ウォーレス線”は ジャワ島とバリ島との間に引かれこれを境としてアジア大陸区とオーストラリア区とに区分されている。動植物学的には比較的 明りょうな区分がなされているが 人類についてはその移動性から 多少のズレがみられる。しかし パプア系人種とマライ系人種との間には比較的明りょうな区分がなされそうである。人類学的にみると 現代人と古人類とに大別され現代人はその皮膚 体毛 骨格等といった生体の特徴によって ヨーロッパ系 モンゴロイド系およびネグロオーストラリア系とに3大別される。このような相違は数万年以上前から地方的に移住 分散 隔離等によって生じそれがさらに地方的な生活環境に支配され その環境に適応した生理的 肉体的特徴が 何世代も積みかさなって生じたものであるといえる。

これらの現代人の先祖はクロマニオン系の人類で これに先行して発生した人類に ジャワ島で発見されたソロ人とか ネアンデルタール系人類 さらに古く いわゆるピセカントロプス系の人類があげられる。

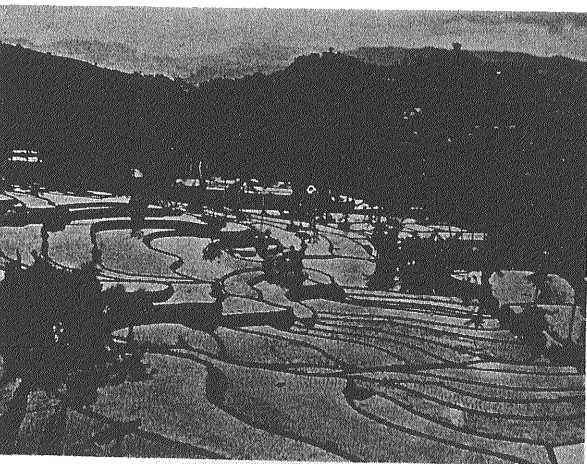
(ただし 最近では人類と猿との間の Missing Link として オーストラロピテクス パラントロプス ジンジャントロプス等の型の古人類がつけくわえられている。)

この最古の人類化石 ピセカントロプスは中部ジャワにおいて発見されたものである。人類と猿との間の Missing Link はマライ半島地区において 発見されるだろうというヘッケルの予言を信じた Eugène Dubois (1858—1940) は 1877年にオランダを出発して この地方に至り 数年間 暗中模索の調査旅行の後 1890年 ジャワ島のソロ川の流域 トリニール地方で ついに人類の頭蓋骨片 小臼歯 大腿骨などを 発見した。こ

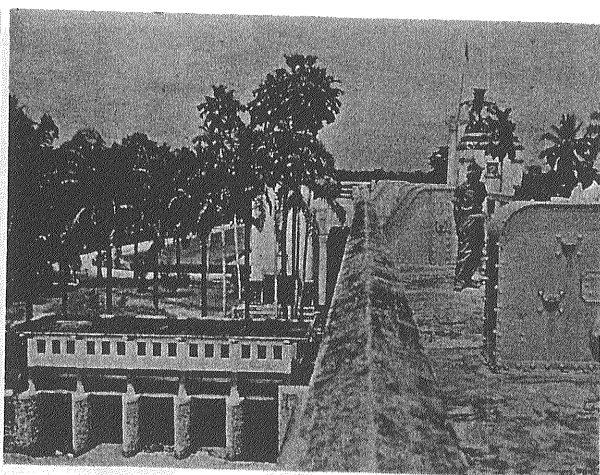
の人類の化石の頭蓋は扁平で長く 前額は幅狭く後退し眉弓は相連絡して著しい隆起をなし 眼窩上隆起の突出 小さな脳容積 (平均775~900cc) は その原始性を示している。しかも 大腿骨は直立で 直立歩行の能力を有していたことが 推察されるものである。この人間化石の発見されたトリニール層は最新世中期のソロ川流域にある3段の段丘の基盤にあたる場所である。このトリニール層の植物相は みかん 月桂樹 無花果など 暖帯性気候を示すものであり 動物相は 虎 ハイエナ サイ 馬 ラクダ カモシカ 水牛 象 などを特徴とするシナントロプス型人類の発見された 中国の河北省 周口店洞くつ層のものに類似するといわれている。これから推察すると 当時は第一間氷期の温暖な気候状態にあったものと考えられている。

ピセカントロプスより少し新しいと考えられるソロ人は 沖積氾らん面より2段上の段丘面から発見されており ネアンデルタール型からクタロマニオン型の移行型と思われる特徴をもっている。これらより新しくなった最終氷期のクロマニオン人の生活面は 現世の河川の沖積面より1段高い地形面であったと 推察されている。アジア大陸のクロマニオン人は この大陸のみならず アリューシャンのような陸橋を通して アメリカ大陸に サディ文化や フォルサム文化を残しているし また オーストラリアでも メルボルン近くのケイラーから発見された ケイラー人の頭蓋骨から アジア大陸からの人類の移動が推察されている。

これらの人類の子孫は 最終の氷河期も生きぬき 約1万年前の後氷期の海浸で つくられた沖積面を生活面として 狩猟から牧畜 農耕 文化と進歩して行き 基本的な労働用具も移り変わり 石器時代 土器時代 青銅時代 鉄器時代と 推移していったものである。



東部ジャバの階段状水田 (地形に合致した曲線美をみせており ジャバにはこの種類の水田が多い)



バンテン地区のオランダ時代に建設されたかんがい用ダム

この間 インドネシアを構成する諸島には 徐々に大陸からの民族の移動が行なわれ その結果 先住民ととの混血が行なわれ 今日のインドネシア民族の基幹をなす3種族が構成されたと考えられている。

- 1) ネグリート系
- 2) プレ ドラビディアン系 (ウエッタ系)
- 3) プロト マライ系

上記の中で 1) 2) の2種族は 群島中に土着し これより先住していた民族と混血融和するとともに 次第にその姿を消し また さらに後からこの土地に入ってきた民族の中に混入消滅し現在では集団をなして見出されることは まれであるといわれる。 3) の種族は後から移住してきたモンゴロ系漢族と混血し 日本民族と同様にこの地ではデウトロ マライ族をつくり 現在のインドネシア民族の基幹となっているジャワ スンダマドラなどの諸人種を構成する源となっている。

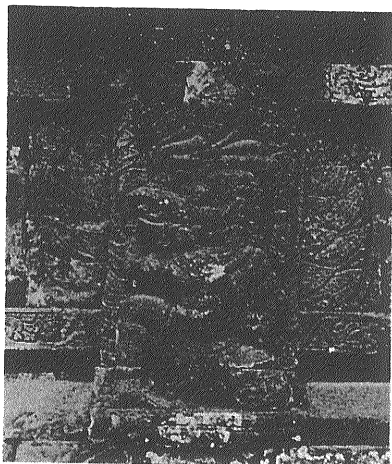
以上の外に西イリアン地方に住むパプア族は 上記の人種とは全く異なり メラネシア系に属し オーストラリア土人とともにいわゆる東洋黒人を形成し 東部のインドネシア諸地域のように ヒンズー 仏教 回教などの文化の恩恵を受けず 文化水準はきわめて低い。 このようなことから 人種的にも ジャワ スラウエシ付近までの西部諸島とイリアンを中心としての東部地域には ウオーレス線同様の人種的分類上の変せん帯があることが明らかである。

インドネシア民族中 最大の人口を有するジャワ人はインドネシア人口の過半数を占め またその大部分がジャワ島に住んでいる。 このため ジャワ島の人口密度が 世界有数であることもうなづける。 このジャワ人は農耕を主とする種族で ジャワ島が土壤 気候ともに

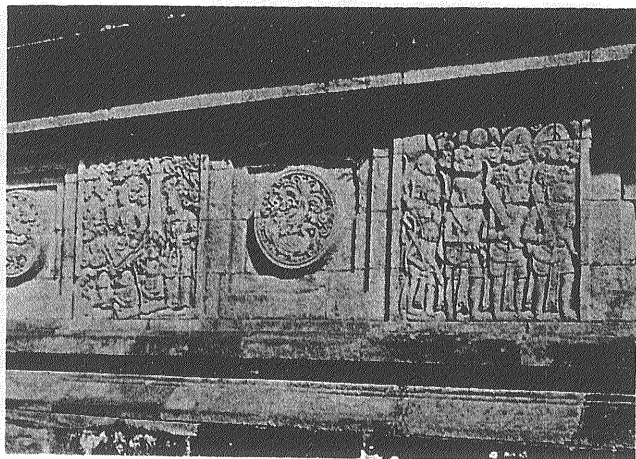
農業に適していることから 有用植物の栽培に発展して行ったものと考えられる。 そのため かんがい技術などにすぐれ とくにヒンズー時代のインド人により伝えられた技術が オランダ時代に改良 機械化されていることに気付くことが多い。

現在 中部 東部ジャワにおいてよくみられる山地部の階段状水田や畑などは ジャワ人が農耕において すぐれた民族であることを示すとともに 人口の増加にともない 次第に山地部の開発がすすめられて行ったことを示している。 今日のインドネシア国の中心となっている人種で ジャカルタや 他の行政地区の首脳部の大部分はジャワ人と スンダ人などの優秀人種により占められているといってもよい。 スンダ人は プロトマライ族が ジャワ族により圧迫され 山地部に入り ここに定着したものと考えられている。 農耕を主とする種族であることは ジャワ人同様で 山地に定住する関係上 典型的な階段式水田を開発する技術にすぐれている。 人口の上からも ジャワ人に次ぎ ジャワ西部地区 とくにインドネシア地質局のあるバンドン市周辺に多く定住している。 スンダ人はジャワ人より皮膚の色が薄く したがって 日本人に近い容貌をもっている人が多くみられる。 バンドン市周辺では スンダ人と中国人との混血 あるいはオランダ人との混血による美人を見かけることも多く その骨格も強健で 表情優雅なところから 概して 美人型の人種である。

マズラ人は東部ジャワのマズラ島およびその周辺に定住する人種で デウトロ マライ系の一支族と考えられ 海洋種族であるとともに 農耕種族でもある。 現在はすべて 回教化され 独得なマズラ語を使用している。 きわめて 簡略な住居に住み 質実強健の風がある。 このほか ジャワ島にはジャカルタマライ族 パズイ族 デボク族 テンギル族 ウシング族 カラン族 バウエン族などの種族が 各地に点在 定住している。 し



キジルの遺跡にみられるヒンズー教の壁画



ブナタラン遺跡の壁画

かし その人口は上記3種族にははるかにおよびない。

スマトラの人種は主としてデウトロマライ系と考えられ 多くの群をなす小人種もすべて これからわかれたと考へてもよいと思われる。 海岸には半島マライ族と同種の人種が 定住し 山地部の民族は すべて 先住していた同種の民族が 山中に逃避し ここに定着して群をなしたと考えられている。

マライ人やインドネシア人の伝説や神話によれば 人類発祥の地をスマトラ とくに中央部南よりの高原地方であるとしているが この事実は日本でも 南九州における高天原と同様の意味にとられ その類似性をもち興味深いものがある。 しかし 実際には人類学あるいは言語学的な研究からプロト マライ族はヒマラヤ山麓地方に発生したものが インド マライ半島の陸橋を経由して スマトラ ジャワその他の群島に入ってきたと考へるのが 正しいと思われる。 スマトラはその入口にあたる関係上 いろいろの神話 伝説が残っているものと思われる。

スマトラの人種にはアチュー メナンカボウ ランボン族等の数が多く かつ その上に有名な首狩種族であったバタック族も含まれている。 すなわち 17世紀以前は 食人の風習や奴隷制度をもっていたこの種族は 1815年のハドリの反乱以後 南の3分の1が回教に改宗さらに 1860年から現在に至るまでの間 ドイツ人宣教師による布教で 大部分がキリスト教に改宗し 悪習が消滅したといわれているが その間 多くの犠牲者を出したことはもちろんのことである。

ボルネオ 現在のカリマンタンに住む住民も大部分が プロトマライ系から 発展したダイヤ族と 海岸地方にすむデウトロ マライ系の種族とに分けられる。

また インドネシアの諸島中最も多く 漢族の文化的

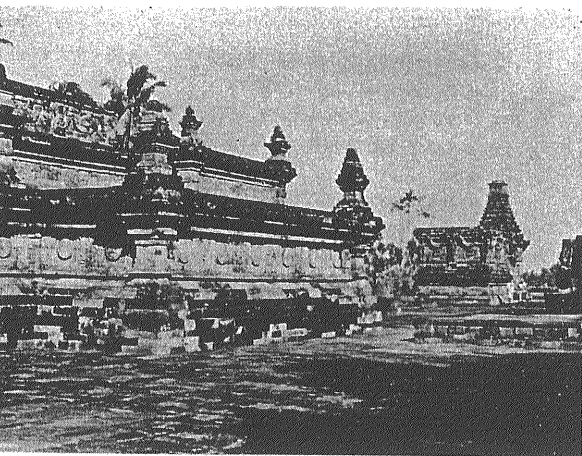
影響を受けているともいわれており 7世紀頃 東北海岸に栄えたファラ王国はシナに貢献し また 15世紀頃には大規模な漢族移民があったといわれている。

16世紀から17世紀にかけてのブルネイ王国の王族も漢族の血を受けており 1850年頃のオランダ軍との抗争もこの漢族とオランダ軍との抗争といってもよいほどであった。

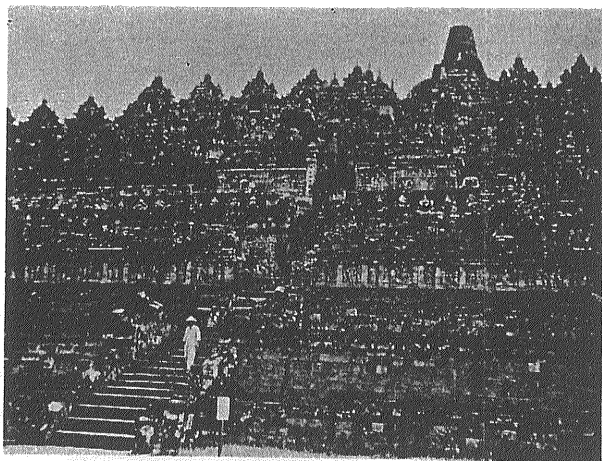
セレベス いわゆる スラウェシは その地理的な条件から 海洋系の種族が多い。 また 山地部と海岸とは相接しているところから文化的な交流が多かったため スマトラ カリマンタンでみられるような明りょうな山地種族は少ない。 先にのべたミナハサ族や 中央セレベスのトラジャ トラムプ トベラ族 南西部のマカッサル族 ブギス族などは優秀人種といわれている。

以上のほか 西イリアンのパプア系種族と スンダ列島中の島嶼に定住するマライ系とパプア系の混血種族をあげると その数は多い。

次にインドネシアの人種で 忘れることのできないのは 漢民族 すなわち華僑である。 漢族のこの地区への移住の歴史は 少なくとも2,000年以上といわれ 日本における元寇の乱の前後 その猛威はこの地はまで及んだといわれている。 これらの華僑は 大陸の戦乱からの逃避によるもので 次第にこの地に根をおろし そのひいでた経済的知識により次第にこの地方の経済力をにぎるようになったといわれている。 このほか アラビア人 インド人 オランダ人のほか 多数の外人との混血により 複雑な形を示している。 このような種族の変せんは 一つの歴史の流れとして この熱帯性の自然環境の下で 行なわれていったものと考察され 現在 インドネシア国内に残されている数多くの遺跡や伝説 風習などから この歴史を考へることは興味深いものである。



ブナランの遺跡(ヒンズー教の色彩の著しい彫刻がみられる)



ボロボドル遺跡の切石の積上げによる構造と壁画

インドネシアの歴史は いろいろな史実から その中心となったのはジャワ島であったといえる。 さらにそれはこの島に多く残されている遺跡から考察される。

大別すると その歴史は 下記のごとくである。

- 1) 有史以前
- 2) ヒンズー 仏教時代
- 3) 回教時代
- 4) オランダ施政時代
- 5) 現代

1) 有史以前

有史以前の歴史については 明らかではないが ピセカントロプスのような古人類は現在のインドネシア人とは直接的な関係はもっていないように考えられる。

古代文明の中心となった紀元前4000年頃のメソポタミアやエジプトの文明 紀元前2500年頃の黄河やインダス文明からの流れをくみ 徐々に東インド諸島にまで 及んできたものと考えられている。 紀元前5世紀頃からインドでは仏教とヒンズー教が同居して信仰されていたが これにともなう文明も同様に インド地域を中心に栄えていた。 インドネシア地域では この流れをくむ文明の移入とさらにモンゴール系漢族の流れをくむマライ人の移住により 各地に種族の群ができ 群居していたもので、これが後から移住してきた仏教 ヒンズー教の信仰をもつ優秀民族により支配され 同化されていったと考えられる。 これらの同化は徐々に行なわれ 大陸に最も近いスマトラから 漸次東に移っていったこともその地理的条件からうかがいえることである。

2) ヒンズー 仏教時代

西暦一世紀に入り インド系種族により ヒンズー王国の“シュリービジャヤ”が 今のパレンバンに生まれ その勢力は 徐々に広がり ジャワ スマトラ カリマンタン スラウエシ南部にまでおよび ヒンズー 仏教

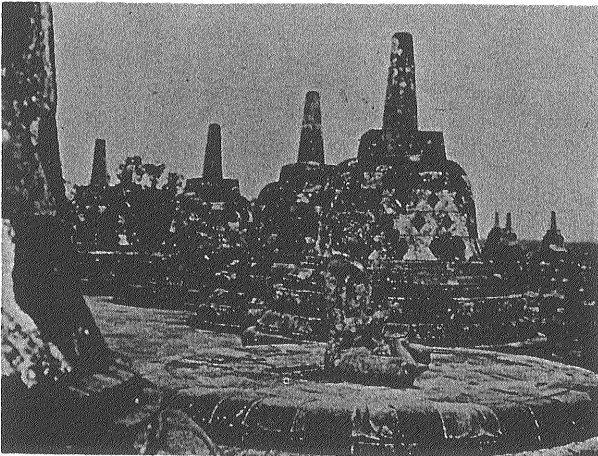
による文明も これにしたがって広がって行った。

ジャワ島では 5世紀ごろに 西部にタルマ王国が 7～9世紀には 中部地区にカリヨウ王国が 栄えたが いずれも シュリービジャヤ王国から 分かれてできたものと考えられる。 7世紀頃 ジャンビ地方に新しくできたヒンズー王国が マラユ王国を併呑して 次第に勢力をのばしたが このような同系統の王国の勢力争いのために シュリービジャヤ王国も シャレンドウ王朝没落後 スマトラからジャワに移っていったと考えられる。 この事実は 現在 多く残されている遺跡から推察される。

仏教はセイロンのシムハラ王国から スマトラに伝わってきて シュリービジャヤ王国の発展とともに ジャワ東部まで 広がってきたが その性格からして 信奉者は主として王族に限定されていたようで 次第にヒンズー教に吸収されていったものと思われる。 したがって7～8世紀頃 ジャワ中部に移ってきたシャイレンドラ王朝により 造築されたボロボドールやカラサンの仏閣にもヒンズー的要素が 多く入ってきていることでも推察できる。

「ボロボドール」の仏跡

有名なボロボドールの仏跡は 中部ジャワのジョクジャカルタ市北方にある。 切石を31mの高さに積みあげた広大なもので 2重基壇の上に方形(各辺が中央に向って3段に突き出したもので 辺の数が20ある)であって5層よりなっている。 最下位の層は 1辺111m その上部に円形の3層を重ね 頂上には鐘形のストウパを置いてある。 内部には部屋はなく 各辺の中央に頂上に通ずる垂直階段と 下位の5層をめぐる歩廊が設けられている。 歩廊には壁画が 彫られており 仏教の伝来 ジャータカ ひゆ物語などを主題にした美しい浮彫りで うずめられている。



ボロボドールの最上段階廊下にみられるストウパと1コだけストウパのない仏像

* 『ジャータカ』(Jataka 本生経) パーリ語でかかれた古来のインド仏教説話集。

仏陀がシャカ族の王子として 生を受ける以前菩薩として生を重ねる間 天人 国王 大臣 長者 庶民 盗賊 ソウ サル クジャク 魚などの動物として善行功徳をなした547話集である。 この説話集の中にはサンスクリット説話集 アラビアンナイト イソップ物語などと 同巧異曲のものがあり 仏教文学としてだけではなく世界的文学として重要なものである。 サルの生ぎも 月のウサギ 子引き裁判 ツルと亀の話など日本でもよく知られているものもある。

様式は インドのグプタ王朝後期(6世紀中期)のそれを伝え その形は円満によくとのっている。

群像の取り扱いはいンドの複雑なものに比してはるかにゆったりしている。歩廊の外側の障壁には総数432体の仏像がおかれ 上部の3層にも72コの中空の鐘形ストーパの中に 仏像がおかれている。ただし その一つにはストーパがなく仏像だけがおかれているが その仏像の端正で おだやかな作りは見事なものである。ポロポドールとは千仏の意味であり 仏教でいうところのまんだらの意味を示している。今なおこの周辺には Pawaon Mendut 等に遺跡があり 一部では 復元するために 再建されているものもある。

「カラサン」「サリ」の遺跡

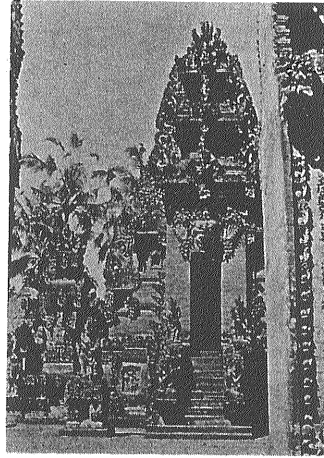
カラサンの遺跡はジョクジャカルタ市からスラカルタ市に通ずる道路に沿っており 上記の市から約14kmのところにある。ポロポドールよりやや新しく 約1,100年前 マサイ王国の時代に 教壇として立てられたものである。

中空の室があり 中にシャカの像が 安置されている。この遺跡は一時火山活動による降灰の下に埋もれていたものが オランダ時代に発掘復元されたものである。「サリ」は「カラサン」の遺跡より数100m スラカルタ市よりにある ヒンズー的要素の多い遺跡の一つである。

以上のほか 東部ジャワには数多くの遺跡があり これらの遺跡の大部分は ヒンズー的要素の多いものであり「ポロポドール」のような仏閣であっても 多くのヒンズーの神などが入ってきている。このことは インド仏教の一つの特徴ともいえるものである。これらの遺跡の大部分は6～7世紀頃から 16世紀頃までにつくられたもので これらの遺跡が 東部地区に移っていることは 回教の侵入による影響と考えられる。

3) 回教時代

14世紀の初めごろ スマトラに広がってきたが 15世紀になると ジャワ島においても 各地にイスラム王国が興ってきた。16世紀中頃から中 東部地方を支配したアタラム王国や 16世紀半ばに西部に興ったバンテン国がよく知られている。これらの回教王国は 16世紀後半からこの地に入ってきたオランダ イギリス ポルトガル等の西欧諸国のために それぞれの支配下におさめられて行ったのであるが 各地にみられる回教王国の遺跡には その当時の様子をうかがうことのできるような名ごりを留めているものも多い。オランダの侵略により 亡んだバンテン国の遺跡なども その一つである。



バリ島デンパフサル付近にみられるヒンズー文化の影響を示す彫刻

4) オランダ施政時代

16世紀頃からの西欧諸国の侵入により 各地の王国は種々の策略により徐々にその属領となっていく。1509年スマトラのアチンがポルトガルにより ジャカルタは1619年オランダの手により占領され オランダ人の町という意味で 当時バタビアという名称がつけられていた。そのほか港タンジョンプリョクは15世紀末までは土侯国バンヤシャランの港で スンダ カラパと呼ばれていたが 1526年中部ジャワのアタラム王国が占領し ジャガトラ(勝利の意)と称した。しかし 間もなくオランダにより占領され オランダの基地として繁栄していった。

日本の徳川時代 オランダとの貿易は この港と長崎港との間で行なわれたという。現在は 東京・ジャカルタ間は 10数時間の行程であるが その当時としては数カ月の行程であったと思われる。オランダの施政時代はその後 第2次世界大戦の終結によるインドネシアの独立までつづき オランダの文明がこの国を支配していた。今もなお 数多くの学校 ホテル その他公共物の多くはオランダの施政当時につくられたものである。

5) 現代

現在はスカルノ大統領のもとに インドネシア共和国として オランダ軍との独立戦により政権を取りかえし 新興国として発展の段階にある。

以上の歴史については ジャカルタの博物館に 各種の遺物が陳列されており 変せん過程を研究する材料となっており また インドネシアの歴史を研究するために 日本やそのほかの国から留学生として ジョクジャカルタのガジャマダ大学にきている人々も多く 歴史学の研究についても興味が多い国である。

(筆者は 飯床部)